

## 牧師所感：従軍神父 長崎の悔恨

上の冒頭のタイトルは、2025年8月8日の朝日新聞夕刊社会面の記事である。筆者が関心を持って記事に執着するのは、筆者も牧師で、戦争で戦った経験があるからである。

さて筆者は従軍牧師（神父ではない）の経験はない。だが朝日新聞に紹介されたジョージ・ザベルカ神父は、アメリカ空軍の従軍神父であった。従軍神父として、当然なすべく義務を果たしたのに、何故神父は悔恨しなければならなかつたのか。だが師が悔恨したのは、「第二次大戦末期、ザベルカ神父は北マリアナ諸島テニアン島を拠点としていた米軍で、『従軍チャップレン』と呼ばれる軍所属の聖職を務めていた」からだと言う。記事によれば、「彼が担当した一つはB29爆撃機などで編成された航空部隊。1945年8月6日、所属するエノラ・ゲイが広島へ、8月9日にボックスカーが長崎へ、原子爆弾を投下した。6日の作戦が行われる前、ザベルカ神父はテニアン島で、乗員たちの無事を祈り、祝福した。」

ところで終戦後、ザベルカ神父は、自分が乗組員の爆弾投下の為、出撃の際に無事に任務を果せるように祈った。その時の師の任務は、出撃する乗務員の無事を祈ることであった。その任務に対して師は、「原爆も空襲も、道徳的に正当化されることに自分は納得していた」と確信している。そのことが、無数の人への命を奪つたこととなつた故、罪意識に悩んだという。戦後ザベルカ神父は、広島・長崎を訪れ、巡礼の旅に出たと言う。彼の同僚ジムス・トマス神父(70)の證言によれば、「ジョージ神父は原爆投下時の役割や被爆地を歩いた経験から、何年にもわたつて深い罪を背負い、それが彼をむしばんでいた」と振り返つたと言う。

ところでザベルカ神父はなぜ罪意識に悩まされたのか？ 師は悪い事をしたのではなく、当然の義務を忠実に果たした。ではなぜ？ 師は神父（筆者は牧師）だから、二律背反の行為に悩んだのではないか。

最後に、師の悔恨は私共牧師が背負わされている宿命（仏教用語）に生きる姿であろう。